

タイトル	T.S.エリオットの文学批評
著者	池内，静司；IKEUCHI, Seiji
引用	北海学園大学人文論集(60)： 69-92
発行日	2016-03-31

T.S. エリオットの文学批評

池 内 静 司

I. はじめに

退職にさいしまして、このような機会を与えてくださいました、北海学園大学人文学会に心より感謝いたします。

実は、私は、人文学部の講義科目を担当しておりませんので、最終講義を行うのは不適切であるのかも知れません。ただ、専門科目である「英米文学講読」という科目を随分と長い間担当してきましたし、一般教育科目の「外国文学」という講義科目を担当していたこともありまして、それらの授業には、人文学部の両学科の学生の皆さんもかなり出席しておりましたから、強引ではありますが合わせ技で一まとめにしてしまうことができますれば、この講義をさせていただく妥当性も幾ばくかはあるのかなと思います。余談を申し上げてしまいました。申し訳ありません。

本日のこの講義のタイトルは、「T.S. エリオットの文学批評」となっております。限られた時間のなかでエリオットの批評の全体について要領よくお話することは、私には至難の業ですので、ここではエリオットの文学批評への「誘い」、あるいは、「紹介」とでも言えそうなお話をさせていただきたいと思います。必然的にその内容は、1920～30 年頃のおよそ 10 数年間を中心に、エリオットの詩人・批評家としての歩みと発言の推移を見て行くことになるかと思います。

さて、最近の日本における文学の傾向、あるいは、好み（それがあればの話ですが）といったことに、このエリオットというアメリカ生まれのイギリスの詩人・批評家がどんな関係を持っているのか、あるいはまったく関係がないのかどうか私には分からないのですが、そういったかなり大き

な問題に目を向けるまでもなく、本学の人文学部の学生の皆さんの中には、エリオットという名前を聞いたこともないという方もいるのではないかと、また、状況はおそらく他学部の学生の皆さんにつきましても同じではないかと思われます。つまり、今日では、英文科の学生か英文学に相当関心がある者でもなければ、エリオットという名前は、劇団四季のミュージカル「キャッツ」(Andrew Lloyd-Webber 作曲の作品。)の原作者の名前として知られているのがせいぜいではないかと思われます。しかし、私が学生の頃は、エリオットという詩人・批評家は、好き嫌いはあるにしても、英文学の、いや世界文学の一つの巨峰をなす巨大な存在でありました。当然、エリオット研究は、最も論文数の多い研究領域の一つであり、「エリオット産業」という言葉があてはまるに十分なほどの活況を呈していたように思います。また、研究対象として他の作家を選んだ場合でも、エリオットの見解を参照していたり、彼の発言に言及していることが、その研究にある種の権威を与えるような、エリオットはそんな詩人・批評家であったように思います。その意味でも、好むと好まざるとに拘わらず、エリオットには「クライテリオン、規準」(‘criterion’)という言葉が相応しいという印象を受けます。実は、この「クライテリオン」という言葉は、1922～39年までの間、彼が自ら編集長となって発行し続けた雑誌の名前でもありまして、その記事の主要部分は、当時のヨーロッパの文学者・知識人への依頼原稿であり、まさにこの「クライテリオン」という名前が冠されるに相応しい、どこかにあるはずのヨーロッパ的な知の規準を求め解き明かそうとするような、そんな野心に満ちた内容のものであったと言って良いと思います。詩人であり批評家であるエリオットについて学ぼうとするとき、この点は是非押さえておくべき点であろうと思います。

ところで、伝記的な事柄をどれほど集めても、それによってエリオットの作品そのものを理解できるということには決してなりません。この点はエリオット自身が力説していることでもあります。しかしながら、非才な我々読者がせめて少しなりとも作者について知ること、作品や批評上の発言がいくらかでも馴染み易くなることがあるとすれば、伝記的な事実を

ある程度知っておくことも、有意義であると言えるかも知れません。そのような意味合いで、エリオットに関わる伝記的な事実を少しお話しいたします。

II. 伝記的事実について

以下の表をご覧ください。

1888 年	Missouri 州東部の都市, Saint Louis に生まれる。
1905 年	Smith Academy 入学 (16 歳)。
1906 年	Harvard Univ. に入学。
1909 年	卒業。大学院へ進学。
1910 年	M.A. 取得。パリへ留学。H. Bergson の講義をコレージュ・ド・フランスで聴講。(帰国後, F.H. Bradley の哲学とめぐり合う。)
1914 年	イギリスへ留学。(Oxford の Merton College へ。)
1915 年	Vivienne Haigh-Wood と結婚。
1916 年	博士号請求論文 <i>Knowledge and Experience in the Philosophy of F.H. Bradley</i> (Faber & Faber, 1964) 完成, Harvard 大学へ送る。
1919 年	エッセイ “Tradition and the Individual Talent”。
1920 年	<i>The Sacred Wood</i> (最初のエッセイ集)。
1921 年	書評 “The Metaphysical Poets”。
1922 年	“The Waste Land” 発表 (初期の代表作とされる)。
1923 年	エッセイ “ <i>Ulysses, Order and Myth</i> ”, <i>Selected Prose of T.S. Eliot</i> , ed. with an Introduction by Frank Kermode (Harcourt Brace Jovanovich/Farrar Strauce Giroux, 1975)
1925 年	“The Hollow Men” 発表。
1926 年	Eliot’s Clark Lectures (Cambridge 大学の Trinity College に

- おける全 8 回の連続講義), *The Varieties of Metaphysical Poetry*, ed. by Ronald Schuchard (Faber & Faber, 1993)
- 1927 年 英国国教会へ改宗。英国へ帰化。エッセイ “Shakespeare and the Stoicism of Seneca”。
- 1930 年 “The Ash Wednesday” 発表。
- 1931 年 エッセイ “Donne in Our Time,” *A Garland for John Donne*, ed. by Theodor Spencer (Peter Smith, 1958)
- 1932 年 *Selected Essays* (Faber & Faber) (エッセイ集)。
- 1933 年 講演 *After Strange Gods: A Primer of Modern Heresy* (Faber & Faber, 1934) Virginia 大学における講演。

エリオットは 1888 年、アメリカ合衆国の中西部、ミズーリ (Missouri) 州東部の都市、セントルイス (Saint Louis) に生まれました。先祖は、17 世紀にイギリスからボストン (Boston) へ移住してきたプロテスタントでありましたが、祖父のウィリアム・グリーンリーフ・エリオット (William Greenleaf Eliot) のとき、さらにセントルイスへと移住いたしました。

エリオット家の歴史を見ますと、社会的にかなりの活躍をした人々の存在が目を引きます。例えば、祖父ウィリアムの曾祖父アンドルー・エリオット師 (the Reverend Andrew Eliot) は、ボストンのオールド・ノース教会 (Old Norse Church) の牧師でした。また、ウィリアム・エリオットの父親 (エリオットの曾祖父) の従兄の一人は、第 2 代アメリカ合衆国大統領ジョン・アダムズ (John Adams) (1797-1801, 1735-1826) であると言われています。ウィリアム自身も、教育と教会の関係で活躍し、また、エリオットの父ヘンリー (Henry Eliot) はレンガ会社を経営する実業家でした。経済的に豊かである一方、家族の雰囲気はユニテリアン (Unitarian) の質素と奉仕の精神に満たされていたようです。ユニテリアンというのはプロテスタントの一派ですが、三位一体説に反対しキリストの神性を認めないという点をその信仰に含んでおります。1927 年にイギリス国教会、それもカトリックの儀式性を強く保持した高教会派に自らの意思で帰属する

ことになるエリオットにとって、この点はおそらくかなり重い意味を持っていたのではないかと推測されます。アニー・ダン（Annie Dunne）という乳母の黒人女性の存在が、意外に大きな役割を果たしたのかも知れません。幼いエリオットの手を引いてカトリック教会へ行ったことがあったとある伝記には記されています。いずれにしても、こういった家族の歴史と雰囲気の中で、母シャーロット（Charlotte）が45歳の時の子（末っ子で7番目の子）として、1888年9月26日、アメリカ合衆国ミズーリ州の都市セントルイスに生まれたわけです。そして、40代に差し掛かるころには、20世紀を代表する詩人・批評家の一人としてその地位を固めて行くことになります。

表にありますように、エリオットは1906年にハーヴァード大学へ入学し、3年後には卒業して直ちに修士課程に進学しました。この段階では、専門は未だ定まっていなかったように見えます。その後、パリで1年間の留学期間を過ごす中で、コレージュ・ド・フランス（Collège de France）で哲学者アンリ・ベルグソン（Henri Bergson）の講義を聴講し、帰国した時には一時的にベルグソン信奉者になっていたと伝えられています。やがてF.H. ブラッドリー（F.H. Bradley）の哲学とめぐり合い、博士課程ではその哲学を研究対象として選択しております。1914年には、ブラッドリーがフェローを務めるイギリスのオックスフォード大学へ1年間の留学に出かけます。そして、留学期間が終了したあともイギリスに留まり、再び母校ハーヴァードに戻るのは、詩人・批評家として文壇での名声をすでに確立した1932年のことで、母校を含めた幾つかの大学で講演をするためでありました。これに先立つ1927年には、イギリス国教会に帰属し、さらにイギリスの市民権も手にしておりました。

ところで、1915年、オックスフォード大学に留学したエリオットは、突然、ヴィヴィアン・ヘイウッド（Vivienne Heighwood）というダンスの得意なモダンガールと、両親の承諾も得ないままに電撃的に結婚してしまいます。哲学者のバートランド・ラッセル（Bertrand Russell）は、ハーヴァード大学の客員教授を務めたことがありエリオットとは師弟関係に

あったのですが、偶然ロンドンで再会し、その後何くれとなくこの若夫婦の面倒をみることになりました。彼は新妻ヴィヴィアンについてかなり特異な印象を述べています。つまり、ヴィヴィアンが、「ナイフの刃渡りをして生きているような女性である」(‘She is a person who lives on a knife edge, and will end as a riminal or a saint; I don’t know which yet.’) (*GREAT TOM* by T.S. Matthews, 1974, p.47) という印象です。若いエリオット夫妻の生活は、当初、彼が書評を書いたり講義を担当したりすることから得られる少ない収入では足りず、ラッセルなどの知人たちの援助に頼りながらの苦しいものであったようです。経済的な面での困難は、1917年春に、ロイズ銀行で働き口が得られたことにより改善したように見えますが、この時期のエリオットには、第一次大戦の戦後処理に関わる銀行の過激な業務と自分自身の勉学や創作にエネルギーを費やすことに加えて、精神的に不安定で病弱な妻ヴィヴィアンの看病という重荷が加わっていた訳です。これが初期の代表作「荒地」(1922年)が生み出された当時のエリオットのおかれた状況でした。しかしながら、エリオット流に言うなら、一篇の詩の創造において重要なのは、このような詩人の精神内部で降り積もり複雑化していく詩人自身の経験そのものではありません。重要なのは、経験の諸要素を化学反応させる触媒としての役割を持つ詩人の精神機能であり、その働きの強烈さなのであって、化学反応における触媒の働きを比喩として用いつつ展開するいわゆる彼の「没個性」説を、大まかなりとも押さえておく必要があるでしょう。ここでは、1927年のエッセイ「シェイクスピアとセネカの克己主義」(“Shakespeare and the Stoicism of Seneca,”)での議論も合わせて参考にすると良いと思います。このエッセイから彼の言葉をそのまま引くなら、「詩人は詩を作り、形而上学者は形而上学を作り、ミツバチは蜜を作り、蜘蛛は糸を分泌する」(‘The poet makes poetry, the metaphysician makes metaphysics, the bee makes honey, the spider secretes a filament.’) (*Selected Essays*, 1932; 1976, p.138) のが仕事であって、それ以外の事をその本分であるかのごとくに取りたてて言うのはお門違いということになります。彼の言う「没個性」とは、自分

の本分たる仕事にひたすらに集中するという側面を基本的要件として含んでいます。そして、「没個性」を追究する詩人の努力が自国の一あるいはヨーロッパの一文学の伝統にしっかりと立脚しているときには、あるいは、そのようなことが可能である時には、そこに個性の表出の問題は生じないということになるでしょう。しかし、そのような自己没入が可能であるためにさらなる要件が必要であるという意識を持つようになるところで、彼の批評（詩論）はさらに展開していくことになるのだと思われます。文学の伝統からさらに視野を広げて、社会の知の状況の如何を問題として意識することによって、エリオットの議論はさらに複雑さを増して行くことになります。

III. 伝 統 論

さて、それでは、エリオットが英国の文壇に登場して間もない 1920 年頃の詩論を実際に幾つか見てみることにいたします。時間の関係もありますので、ごく一部のものに絞って扱いたいと思います。なお、ここではエリオットのエッセイと書評は特に支障がないかぎり共にエッセイとして扱うことにいたします。と言いますのは、例えば 1921 年の“The Metaphysical Poets”は、H.J.C. Grierson の『17 世紀形而上詩選』（*Metaphysical Lyrics and Poems of the Seventeenth Century, Donne to Dutler*, 1921）の出版を受けて「タイムズ紙文芸付録」（*TLS*）に寄せた書評であります。1932 年に出版されました彼自身のエッセイ集（*Selected Essays*）には、エッセイの一つとしてこれが収載されておりますし、その後のエリオット研究でもこの書評をエッセイの一つとして扱うのが普通のことであり、このことに特に異論は出ていないと思われるからです。

さて、繰り返しになりますが、いわゆるエリオットの「伝統論」、伝統との関係で語られる「没個性説」、そして、当然これら二つの観点と調和的な内容のものとして展開されているはずの 17 世紀英国の形而上派の詩人たちに備わるとされる「統合された感受性」（‘unified sensibility’）について

の議論が、この当時の彼の批評の大枠を構成していると考えられますが、彼自身の言葉でどのように述べられているのかを、以下に簡単に見てみたいと思います。出来るだけ煩雑化を避けるために、ここでは主に以下の(a)(b)二つのエッセイに目を向けるに留めます。(b)の代わりに、最初のエッセイ集である『聖なる森』(*The Sacred Wood*)所収のエッセイ「ダンテ」"Dante"(1920 年)を利用しても、同じ結果を得ることができます。

(a)「伝統と個人の才能」"Tradition and the Individual Talent,"
The Sacred Woods (1920; Methuen, 1983)

(b)「形而上派の詩人たち」"The Metaphysical Poets," *Selected Essays* (1932; Faber & Faber, 1976) に収載

(a)については、まず以下の発言に注目したいと思います。ここにはエリオットの伝統についての考え方が示されております。伝統には何よりも「歴史感覚」('historical sense')が必要であると述べた部分に続く文章です。

(a) - 1

しかしながら、もし伝統ということの、つまり、伝え残すということの唯一の形式が、我々のすぐまえの世代の収めた成果を墨守して、盲目的にあるいはおずおずとその行き方に追従するということにあるのなら、「伝統」とは、はっきりと否定すべきものでありましょう。我々はこのような単純な流れが、たちまちにして砂中に埋もれて行くさまを、たびたび目の当たりにしてきたのです。それに新規は反復にまさるものです。伝統とはこれよりはるかに広い意義を持つ事柄なのです。それは相続するなどという訳にはいかないもので、もしこれを望むなら、非常な努力を払って手に入れなければならないものなのです。伝統には、何よりもまず、歴史感覚ということが含まれます。これは 25 才を過ぎててもなお詩人たらしとする人には、ほとんど欠くべからざるものと言ってよい感覚です。そしてこの歴史感覚には、過去が

過ぎ去ったというだけでなく、過去が現在に生きているということの知覚を含むのであり、それは我々がものを書くとき、自分の世代を骨髓のなかに感ずるのみならず、ホーマー以来のヨーロッパ文学の全体、および、その一部をなしている自国の文学の全体が同時に存在していて、一つの秩序を形成していると感じさせずにおかないものなのです。この歴史感覚は、時間的なものばかりでなく時間を超えたものにたいする感覚であり、そしてまた、時間的なものと超時間的なものと一緒に認識する感覚でもあって、それがあることが作家を伝統的ならしめるのです。そして、それは同時に、時間の流れの中で彼が占めている位置と、彼自身が属している時代にたいして、彼を最も敏感にするものなのです。（Yet if the only form of tradition, of handing down, consisted in following the ways of immediate generation before us in a blind or timid adherence to its successes, 'tradition' should positively be discouraged. We have seen many such simple currents soon lost in the sand; and novelty is better than repetition. Tradition is a matter of much wider significance. It cannot be inherited, and if you want it you must obtain it by great labour. It involves, in the first place, the historical sense, which we may call nearly indispensable to anyone who would continue to be a poet beyond his twenty-fifth year; and the historical sense involves a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence; the historical sense compels a man to write not merely with his own generation in his bones, but with a feeling that the whole of the literature of Europe from Homer and within it the whole of the literature of his own country has a simultaneous existence and composes a simultaneous order. This historical sense, which is a sense of the timeless as well as of the temporal and of the timeless and of the temporal together, is what makes a writer traditional. And it is at the same time what makes a writer most acutely

conscious of his place in time, of his contemporaneity.) (*The Sacred Wood*, p.49)

(a) - 2

いかなる詩人も、またいかなる芸術家も、たった一人だけで完全な意味を持つ者はおりません。その意義、その評価は過去の詩人や芸術家たちにたいする関係の評価に他なりません。その人単独ではこれを評価する訳にはいかないのです。比較し対照するために、これを死者のなかに置いてみなければなりません。私はこれを、ただ単に歴史的批評の一原理として言っているのではなく、審美的な批評の原理として言っているのです。詩人や芸術家が、過去に順応し一致しなければならないと言っても、それは一方的なことではありません。一つの新しい芸術作品が創造されると、それに先立つあらゆる芸術作品にも同時に起こるような何事かが起こるのです。現存の様々なすぐれた作品は、それだけで相互に一つの観念的な秩序を形成しておりますが、その中に新しい（真に新しい）作品が入ってくることにより、この秩序にある種の変更が加えられます。現存の秩序は、新しい作品が出てくる前にすでに出来あがっている訳ですが、新しいものが加わった後でもなお秩序が保たれているためには、現存の秩序の全体が、たとえわずかでも変えられなければならないのです。(No poet, no artist of any art, has his complete meaning alone. His significance, his appreciation is the appreciation of his relation to the dead poets and artists. You cannot value him alone; you must set him, for contrast and comparison, among the dead. I mean this as a principle of aesthetic, not merely historical, criticism. The necessity that he shall conform, that he shall cohere, is not one-sided; what happens when a new work of art is created is something that happens simultaneously to all the works of art which preceded it. The existing monuments form an ideal order among themselves,

which is modified by the introduction of the new (the really new) work of art among them. The existing order is complete before the new work arrives; for order to persist after the supervention of novelty, the *whole* existing order must be, if ever so slightly, altered.... (ibid., pp.49-50,)

このエッセイでの発言の要点を箇条書き風に纏めてみますと、おおよそ以下のような纏めが可能と思われます。

- (1) 伝統を持つには歴史感覚が不可欠である。
- (2) 歴史感覚は、時間的なものと時間を超えたものにたいする感覚であり、またそれらを同時に認識する感覚である。
- (3) いかなる詩人も、またいかなる芸術家も、それだけで完全な意味をもつものはない。その意義、その評価は過去の詩人や芸術家たちにたいする関係の評価にほかならない。
- (4) 歴史感覚を持つと、これまでのヨーロッパ文学の全体が同時に存在して一つの秩序を形成していると感じる。
- (5) そのような秩序のなかに真に新しい作品がはいってくると、全体の秩序が変更される。
- (6) 詩人（芸術家）は、詩の主流というものを強く意識していなければならないが、それは最も著名な作家たちの間だけを流れているとは限らない。
- (7) 詩人（芸術家）は、芸術は決して進歩せず、ただその素材は絶えず変化しているということを、よく知っていなければならない。
- (8) 詩人（芸術家）は、自国の精神やヨーロッパの精神が、自分自身の個人的な精神よりはるかに重要であることを知る。
- (9) 詩人（芸術家）は、自国の精神やヨーロッパの精神が変化する精神であり、また、その変化は、その途中でなにもものも捨て去ることがない発展である、ということを知っていなければならない。

このようなことを述べた後、彼はいわゆる詩（芸術）の「没個性」説を展開しております。どの部分を取り上げるべきか迷いますが、取りあえず以下の発言を見てください。

(a)－3

それ（詩）は、実際的な活動的な人間なら経験ともなんとも思わないような、非常に数多くの経験の一種の一点集中であり、この一点集中から結果するところの全く新しいあるものなのです。しかもそれは、意識的にも意図的にも起こってこない一点集中なのです。（中略）詩を書く場合には、意識的、意図的でなければならないことが沢山あります。事実、まずい詩人というものは、たいてい意識的であるべきところで無意識的であり、無意識的でなければならないところで意識的なものです。いずれの誤りも、ともに詩人を「個性的」ならしめることになるのです。詩は情緒の解放ではなくて、いわば情緒からの逃避なのです。それは個性の表現ではなくて、いわば個性からの逃避です。しかしもちろん、個性や情緒をもっている者だけが、これらのものから逃避したいということがどういう意味なのかを知っているのです。It(=poetry) is a concentration, and a new thing resulting from the concentration, of a very great number of experiences which to the practical and active person would not seem to be experiences at all; it is a concentration which does not happen consciously or of deliberation..... There is a great deal, in the writing of poetry, which must be conscious and deliberate. In fact, the bad poet is usually unconscious where he ought to be conscious, and conscious where he ought to be unconscious. Both errors tend to make him 'personal.' Poetry is not a turning loose of emotion, but an escape from emotion; it is not the expression of personality, but an escape from personality. But, of course, only those who have personality and emotions know what it means to want to escape from these

things.) (p.58)

＊「伝統と個人の才能」の日本語訳については、安田章一郎訳（研究社刊『英米文芸論双書－12－』）、および、深瀬基寛訳（中央公論社刊『エリオット全集－第5巻』所収）を参考にした。

すでに触れましたように、エリオットが上記のエッセイで言う「伝統」（文学の「伝統」）とは、過去から現在に至るまでのすべての要素（作品）が同時的に存在し構成する、一つの秩序として示されるものです。そこには通時的・歴史的な相ばかりでなく共時的な相が存在しています。結局、それは人間の頭の中でイメージされる観念的な存在であります。そのようなことをイメージして感じ取ることができるためには、歴史感覚というものが必要だとエリオットは言っているのです。しかし、エリオットの言う伝統には、共時的な存在の相を強調することによって、過去のあらゆる要素と付き合わされる場としての現在時にたいする意識が、とりわけ強烈であるように思われてきます。そして、伝統という秩序の重要な要素の一つとなる作品を生み出すべきことを自覚し、作品の制作に努力を惜しまないこと、このことが、結局は、彼の没個性説が各作家へ要請する事柄であると言えるでしょう。歴史感覚が備わっていてエリオットが言うようなことを自覚するならば、おそらく作家の努力の方向性についての認識が形成され、伝統の中心的な流れに位置する作品が如何なる類の作品なのかということについての認識が得られることになるでしょう。そのような作品では、おそらく作家の生きる時代の時代性（モダンティ）の問題や、作家の仕事の本質を問う視点が取り上げられる必要が出てくるのではないかと思います。ここでは、少し瑣末なことに思われるかもしれませんが、1920 年頃、つまり、「伝統と個人の才能」が公にされた時期のエリオットの詩論では、「没個性」の問題は、明らかに創作主体である詩人個人の側の問題に帰されているように見える、ということを押さえておきたいと思います。問題が拡散することを避けるためにも、ここではこれ以上の

詮索は避けたいと思います。

IV. 感受性論

エリオットの伝統論と没個性説については、ひとまず以上のことを念頭に置いて、次の(b)「形而上派の詩人たち」(‘The Metaphysical Poets’)(1921年)に目を向けることにします。この中でエリオットは、形而上派の詩人たちと呼ばれる一群の詩人たちを、ヨーロッパ、および英国の文学の中心的な流れに属する詩人たちとして取り上げております。それ故に、「伝統と個人の才能」で指摘された伝統の中心的な流れに位置する詩人たちの中に、少なくとも形而上派の詩人たちが含まれていると考えることができるはずです。このエッセイで彼は、形而上派の詩人たちの感受性に言及し、それが思想と感情の統合された状態にある感受性であると述べておりますが、ここで「思想」と「感情」という言葉でエリオットが意図しているのは、大まかに言って、前者の「思想」が思想の構築と関わるような詩人の論理的な、分析的な能力であり、後者の「感情」は心の状態をもたらす感覚的な受容能力、簡単に言えば感じる能力を表していると推測されます。

さて、エリオットは、形而上派の詩人たちに備わる感受性の特徴について、時代の進展とともにそのような特質を失ってしまった詩人たちとの比較で、次のような有名な発言を行っています。

(b) - 1

詩人たちの間の相違は、程度の差というような簡単なものではありません。それは、ダンやチャーベリーのハーバート卿の時代からテニスンとブラウニングの時代までに英国人の精神に起こったあるものなのです。それは、知的な詩人と内省的な詩人との相違です。テニスンとブラウニングは詩人であって、彼らは考えますが、しかし、彼らは自分の思想をバラの香りのごとく直接的には感じません。思想は、ダンにとって、経験でありました。それは、彼の感受性を変えました。

詩人の心が勤めを果たすのに申し分のない力を備えているとき、それは絶えず異質な経験を混和しつつあります。普通の人の経験は、混沌としていて不規則的で断片的です。後者は恋したり、スピノザを読んだりしますが、この二つの経験は、互いに、あるいはタイプライターの音や、料理の匂いと何も関係がありません。ところが詩人の心の中では、こういった経験が絶えず新しい経験を形成しているのです。

その相違は、次のような理論で表せるかもしれません。16 世紀の劇作家の後継者であった 17 世紀の詩人たちは、どんな種類の経験をも我がものにし得る、感受性の機構を持っていました。彼らは、先輩たちと同様、単純で技巧的で晦渋で、もしくは気まぐれであって、ダンテやギドー・カバルカンティやギニチェリーや、あるいはチノーとほとんど変わるところがありません。17 世紀になって、感受性の分裂が訪れ、それから我々は回復していません。(The difference is not a simple difference of degree between poets. It is something which had happened to the mind of England between the time of Donne or Lord Herbert of Cherbury and the time of Tennyson and Browning; it is the difference between the intellectual poets and reflective poets. Tennyson and Browning are poets, and they think; but they do not feel their thought as immediately as the odour of a rose. A thought to Donne was an experience; it modified his sensibility. When a poet's mind is perfectly equipped for his work, it is constantly amalgamating disparate experience; the ordinary man's experience is chaotic, irregular, fragmentary. The latter falls in love, or reads Spinoza, and these two experiences have nothing to do with each other, or with the noise of the typewriter or the smell of cooking; in the mind of the poet these experiences are always forming new wholes.

We may express the difference by the following theory: The poets of the seventeenth century, the successors of the dramatists

of the sixteenth, possessed a mechanism of sensibility which could devour any kind of experience. They are simple, artificial, difficult, or fantastic, as their predecessors were; no less nor more than Dante, Guido Cavalcanti, Guinicelli, or Cino. In the seventeenth century a dissociation of sensibility set in, from which we have never recovered....) (pp.287-8)

*日本語訳は、村岡勇訳（中央公論社刊『エリオット全集第3巻』所収）を参考にした。

いわゆる彼の言う「感受性の分裂」(‘dissociation of sensibility’) についての説明の一部ですが、16世紀～17世紀のどこかで、詩人たちに備わっていた思想と感情の統合された感受性に亀裂が入り、これが分裂し、詩人たちは内省的であったり感傷的であったりするようになってしまったと、エリオットは言っています。本来の望ましい感受性の状態においては、彼によれば、詩人は「思想をバラの匂いのように直接的に感じる」のですが、同じことをエリオットは、少し言い方を変えて、「思想を直接的、感覚的に把握する」とも言っております。このあたりのことをもう少し探るために、1920年のエッセイ「ダンテ」に目を向けてみましょう。この中でエリオットは、ダンテはいわゆる哲学詩人ではない、というようなことを言っています。つまり、哲学を韻文で表現する詩人は、その本分は詩人ではなく哲学者であると言わねばならない訳です。これに対してダンテが目指したのは、トマス・アクィナスの哲学を韻文で解説することではなく、その哲学に依拠して『神曲』という作品を書くことであり、あくまでダンテが経験の対象としてその感受性で受け止めたものの表現としてでありました。ですからアクィナスの哲学も、「形而上派の詩人たち」で言われているように、スピノザの哲学と同様に他のいろいろな経験と混和して、絶えず新しい経験を形成し、心の状態を生み出しているという訳です。具体的なメカニズムは不明ですが、思想という言葉で表される対象も、詩人の精神の中では

常に心の状態となるような経験として消化されると言って良いかも知れません。

V. ジョン・ダン評価の変更について

さて、繰り返しになりますが、英国の文壇に登場して間もない 1920 年頃のエリオットの詩論は、ここに提示しました「伝統と個人の才能」と「形而上派の詩人たち」という二つの資料を重ね合わせることによってその大枠を得ることができます。しかし、実際にそれらの内容全体を一まとめにして扱ったエッセイを、この時期のエリオットは書いておりません。それには何らかの理由があったのではないかと疑われます。例えば、これらのエッセイを発表したときのエリオットは 30 歳を少し過ぎたばかりであり、いわば発展途上の若者であったという理由です。このことを考慮しますとき、事実は、次のようなことだったのではないかと私には思われます。つまり、エリオットにとって上記の二つのエッセイが扱う内容自体は、互いに調和的に存在するはずのものであるにしても、そのように表立って主張するのをためらわせる側面があることに、当時、彼自身が気付いていたのではないかということです。この後、彼は 1926 年のクラーク講義の講師を務める機会を得て、形而上詩についての探究を深める好機とします。そしてさらに 5 年を経た 1931 年、ジョン・ダンに対する評価を変えたかのような発言をすることになります。つまり、以下の(c)－1のエッセイでの発言です。

(c)－1

ダンには、思想と感受性とのあいだに明らかな亀裂が存在します(下線は池内)。彼は詩において、自分のやり方でそれに橋渡しをしました。が、それは中世的な方法ではありませんでした。彼の学識は、情緒でみたまされた情報にすぎないか、あるいは、当の情報とは本質的に関連していない情緒と結びつけられたものでした。ダンテの詩の場合、ま

た、ギード・カヴァルカティの詩においてさえ、常に、経験には統一があるという考えの前提、経験が究極的には合理的に説明され、調和を与えられるという確信、高いもののもとでの低いものの包摂、程度の差はあってもアリストテレス的な世界の秩序づけが存在しているのです。(In Donne, there is a manifest fissure between thought and sensibility, a chasm which in his poetry he bridged in his own way, which was not the way of mediaeval poetry. His learning is just information suffused with emotion, or combined with emotion not essentially relevant to it. In the poetry of Dante, and even of Guido Cavalcanti, there is always the assumption of an ideal unity in experience, the faith in an ultimate rationalization and harmonization of experience, subsumption of the lower under the higher, an ordering of the world more or less Aristotelian. (*A Garland for John Donne*, ed. by Theodor Spencer, 1931; Peter Smith, 1958, p.8)

エリオット研究において問題となってきた点の一つがここに見られます。感受性についての議論は、かつては思想と感情の統合を定式として行われ、それゆえ、その「分裂」についての議論は、この両者間の分裂として提示されましたが、ここでは「思想」と「感受性」との間の亀裂を指摘するという構造で議論が展開されています。このような発言によってエリオットが意図したのはどのようなことだったのでしょうか？

VI. エリオットのクラーク講義

エリオットのクラーク講義(1926 年)は、この問題を解き明かすのに有益な情報を与えてくれます。彼の議論には、おおよそ以下のように纏められるひとつの仮説の存在が読みとれます。すなわち、13・4 世紀のダンテの時代からそれ以降の時代への推移を、「本体論主義」(‘ontologism’)から「心理主義」(‘psychologism’)への推移として捉え、その推移の過程で「知

性」(‘intellect’)の崩壊が生じたという仮説です。「形而上派の詩人たち」においては漠然と17世紀に始まったと言われた「感受性の分裂」(‘a dissociation of sensibility’)は、このクラーク講義では、このような知性の崩壊によって必然的に生じたことと推測されています。17世紀の英国の詩人たちの中でも、エリオットが形而上詩と見なす詩の作者たちは、細部の状況に相違はあるにしても、こういった知性の崩壊過程にありながら、なお、ダンテやその同時代の詩人たちの場合と同様の感受性の〈特質〉を示す詩人たちとして捉えられているのです。このような「本体論主義」から「心理主義」への推移が、いかなる点を問題として言われているのかについては、エドワード・ロップ(Edward Lobb)が与える説明の一部をも参考にしますと、以下のように簡略に纏めることができるでしょう。すなわち、「本体論主義」のもたらす状況とは、たとえば正否の判定にさいして、確固とした典拠の存在ゆえに、自身の判断の個別性を疑う必要のない状況であり、「心理主義」の場合には、判断する主体の考えに依存し、その個性が意識され、それゆえに、それぞれの精神の独自性に注意が向けられる状況であるということです。このようなクラーク講義に見られる仮説を念頭に置き、ダンとダンテについての見解を中心にクラーク講義におけるエリオットの形而上詩観について見てみたいと思います。

クラーク講義において、エリオットは、「形而上詩一般の本質とは、ダンとダンテとの間にある類似と相違の双方を含んでいます」(*The Varieties of Metaphysical Poetry*, p.158)と端的に表明した後で、ダンテから19世紀のラフォルグやコルビエールにまで至る詩人たちについて検討し、自身の抱く形而上詩観について、以下のようにその輪郭を述べています。

(d)－1

形而上詩とは、思想という背景の存在、つまり、明確なひとつの体系による背景か、幾つかの明確な体系の断片からなる背景の存在を必要とするのです。(Metaphysical poetry involves the existence of a back-ground of thought, of a definite system or fragments of

definite systems.) (p.203)

(d)－2

私が形而上詩として受け止めるものは、その詩において、通常は思想によってのみ理解されるものが感情による把握の範囲内に持ち込まれていたり、あるいは、通常ただ感じとられるだけのものが、変容され、思想の形をとるに至ってもなお感情でなくなることはない、そういう詩であるということをご理解いただきました。

You have understood that I take as metaphysical poetry that in which what is ordinarily apprehensible only by thought is brought within the grasp of feeling, or that in which what is ordinarily only felt is transformed into thought without ceasing to be feeling. (p. 220)

このような発言から推測されるのは、ダンもダンテも思想の体系やその断片を経験したさいに、それを心の状態とする精神機能については共に優れており、この限りで両者は形而上派の詩人と見なすことのできる詩人たちであろうということです。しかし、ダンとダンテには大きな相違があって、しかもその相違は少し前の部分で「本体論主義」と「心理主義」の相違として取り上げた議論と関係しております。そして、それがダンテに対して終生変わらぬ絶大な評価を惜しまなかった理由でありました。ダンテについて、エリオットは、その仲間たちも含めて次のように述べています。

(d)－3

私は、いま、できるなら、ダンテとその友人たちにおいては、いかに思想と感情の秩序だった体系の受容が、平易で直接的な、また、簡潔とさえも言える彼らの言葉を結果させたかを示したいのです……。 (I want now to show, if I can, how the acceptance of one orderly system of thought and feeling results, in Dante and his friends, in a

simple, direct and even austere manner of speech....) (p.120)

(d)－4

ダンテやその仲間たちの場合には、感情は宇宙についての組織化された見解に従って構成されており、その結果、その体系内のあらゆる細部に対する、そしてまたその体系の極致に対する、(中略)その体系全体に対する感情の等価物が見られるのです。(… with Dante and his circle, the feelings are organized according to an organized view of the universe, so that there is given the feeling- equivalent for every detail in the system and also for the consummation of the system... and also for the system as a whole.) (p.154)

言い方を変えると、ここでエリオットが言っているのは、ダンテの時代に世に広まっていた思想や知的雰囲気、それらを足場として与えられる世界像、またその描写において用いられる言葉等が、エリオットにとって、作者のダンテという個性を介在させないほどに、ゆるぎない直接性をもって描かれているということだと推測されます。つまり、そのような状況が生まれるほどになすべき仕事に完璧に身を委ねることによって没個性の状態が得られるということです。

これに対して先に見たように、その思想と感受性との間に難点を指摘されることになるダンテは、「無秩序な状態にある 14 世紀イタリアのひとつの精神である」(p.133)と時代の状況を引き合いにして弁護されながらも、詩人としての地位は、「もっとも偉大なものたち、つまり、シェイクスピアやダンテ、ギョー、カトラスなどと同列にあるのではない」(p.133)といささか貶められ、その特性については以下のような指摘を受けることになります。

(d)－5

ダンの形而上派的特性が存在するのは、思想のうちにというよりは、

思想の展開においてなのです。(It is not so much in the thought, as in the development of the thought, that Donne's metaphysical peculiarity resides.) (p.87)

(d) - 6

……私が言っていることは、ダンの宗教上の著述、説教、そして宗教詩は、私には常に不完全な集中という印象、身をゆだねたり同意することによる以上に、強い意志によって様々な力をまとめ上げているという印象を与えるということです。(… I mean that his religious writings, his sermons and his devotional verse, always give me an impression of an incomplete concentration, of a direction of forces more by a strong will than by surrender and assent.) (p.117)

(d) - 7

他方、ダンの場合には、……その特異性は秩序の不在、思想を無数の思想へと破碎することなのです。ダンは混沌の詩人、混沌の真の詩人、おそらくは、混沌の偉大な詩人でさえあるのです。思想を幾つもの思想に破碎するということの意味は、彼の詩篇を結び付ける、あるいは、どの詩であれそれをひとつにまとめる唯一のものが、不満足ながら、ダンの個性と呼ばれるものであるということです。(On the other hand, with Donne... the peculiarity is the absence of order, the fraction of thought into innumerable thoughts. Donne is a poet, a true poet, perhaps even a very great poet, of chaos. And this fraction of thought into thoughts means that the only thing that holds his poems, or any poem, together, is what we call unsatisfactorily the personality of Donne.) (pp.154-5)

ここに見られるのは、ダンの感受性に対する不満というよりは、扱う思想とこれに対するダン自身の対応についての問題の指摘であると言ってよい

でしょう。つまり、思想に対するダンの対応の仕方にエリオットは、ダンテとは異なった形の対応を示す詩人ダンの本質を読みとっている、という訳です。「没個性」を可能とする条件が、1920 年頃には歴史感覚を備えた詩人がなすべき仕事に自己を滅却して打ち込むことであり、詩人の個人的な努力によって可能となるかのように考えられていたのが、クラーク講義においては、詩人の活動の背景にある思想と詩人がそれに対して持つ関係の在り方、つまり、詩人にとっての思想とその受容という論点を中心にして、しかも、そこに時代の知的状況が及ぼす影響、つまりは心理主義の影響という問題が読み込まれているのであり、問題の所在は、詩人の側の個人的な努力を超えた次元にまで拡大されているのです。そして、「没個性」が詩人の個人的な努力を超えたレベルの問題をも含めて扱われねばならないものであることから推測して、エリオットの議論には、これが個々の詩人を対象とし、その特異な精神の働きについて述べる感受性論とは、必ずしも同時的に満たされ得る要件ではない、という認識が存在するであろうと推測されるのです。1920 年頃とクラーク講義との間には、エリオットの見解に、このような相違が生じていると見る事が出来るでしょう。そして、この事を考慮するとき、「思想」と「感情」との間にではなく、「思想」と「感受性」との間に亀裂を指摘する「我らの時代のダン」における彼の議論は、単に言葉のルースな使用例としては片づけられない、きわめて明確な意図をもって提出されたものと考えざるを得なくなるのです。ダンとはダンテとは異なって、自身の個性を拠り所として経験の諸相と向かい合い、詩の世界を一つに纏め上げていると見られる訳です。

時間の制約もあり、細部の議論を大幅に省略しましたが、クラーク講義を参照することによって、エリオットの発言を理解しやすくなる側面があることは理解していただけたかと思います。

エリオットはある講演で、19 世紀の詩人・批評家 S.T. コールリッジ (Coleridge) に言及し、彼の亡霊が墓場の陰から自分に手招きをしておりますと述べて、その講演を締めくくったことがありました。話の拙さを詫び、敬愛するコールリッジを幕引き役とした訳ですが、私もまたエリオットに

倣ってこの授業を終えさせて頂けましたら、幸いに思います。

「拙い話はもうそのくらいにして降壇しなさいと、エリオットの亡霊
が墓場の陰から手招きしております。」

御清聴，ありがとうございました。